





審査結果報告書

平成 26 年 2 月 13 日

主 査 氏 名	栗原克由	
副 査 氏 名	宮地 鑑	
副 査 氏 名	石川 均	
副 査 氏 名	神谷和孝	

1. 申請者氏名 : DM10013 笠原 正行

2. 論文テーマ :

Comparative Kitasato-type optical coherence tomography study of differences in scleral shape between the superonasal and superotemporal quadrants
(北里式 OCT による上鼻側と上耳側における強膜勾配の比較検討)

3. 論文審査結果 :

平成 26 年 2 月 13 日に臨床医科学群眼科学博士課程学位論文公開審査が行われた。

本研究は、眼圧下降手術である線維柱帯切除術を行う際に、濾過胞を作成するが、それを上耳側ないし上鼻側のどちらに作成したら癒着が少なく、濾過胞が維持されやすいかを上耳側強膜と上鼻側強膜の表面の勾配を前眼部 OCT を用いて定量的に比較することで検討したものである。その結果、上鼻側の方が有意に強膜勾配がなだらかであり、上鼻側に濾過胞を作成した方が強膜の表面の勾配がより平坦であるために結膜と強膜との間に距離が生じ、癒着が起りにくく、濾過胞が維持されやすい可能性が考えられた。これまでに強膜の形状を上耳側と上鼻側で比較検討した研究はなく、形状が異なることを明らかにしたことは新しい知見であり、眼科臨床に還元する有益性は大きいと考えられる。しかし、房水が貯留するほど容積が確保され、実際に眼圧下降に有利に作用するかどうかまでは検討するには至っていない。今後、線維柱帯切除術を施行する緑内障患者の術前に強膜の勾配を測定し、強膜の勾配と術後の眼圧下降効果の相関などについてさらなる研究を期待したい。質問に対してはほぼ的確に答え、笠原正行君は医療系研究科博士課程を修了するに十分な学識を有していると評価された